

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32648

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350081

研究課題名(和文)日本の主婦・母親像の形成 衣生活の変容から考える女性と家族の研究

研究課題名(英文)Clothing for Japanese Good Wife and Wise Mother in modern times

研究代表者

山村 明子(YAMAMURA, akiko)

東京家政学院大学・現代生活学部・教授

研究者番号：60279958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)： 賢妻良妻教育が提唱された明治から大正期の主婦の装いを英国と比較検討した。英国の主婦には家政を取り仕切る女主人の役割と、他者を意識した装いが求められた。一方、日本の主婦にも家政を担う役割が求められたが、社会とのつながりを意識した装いではなかった。また、家事使用人の人材不足から、自らが家事を行う主婦へ転換した。家事労働着が家庭着と称され、家事労働を行うための装いが主婦の装いとなった。良妻賢母の姿は家事労働をする姿に集約された。

さらに、戦後の寝衣の変遷について検討した。夫の視線を意識する negligee から、カジュアルなスウェット等への移行の背景には、生活空間や夫婦関係の変化が関与している。

研究成果の概要(英文)： This study weighed the clothes of the Japanese housewife from Meiji to the Taisho era against the U.K.

The British housewife played a role as the hostess who managed housekeeping. Therefore their clothes were conscious of others. On the other hand, the Japanese housewife played a role to take housekeeping on, too. However, their clothes were not conscious of a connection with the society. In addition, lack of talented person of the housework servant became the problem in those days in the two countries. Therefore housewife oneself switched it to the housewife who performed housework. The work clothes for domestic chore was named home wear, and the clothing to perform housework became the clothing of the housewife. The figure of a good wife and wise mother was that of housewoker.

I examined the change of nightclothes after World War II. From negligee to sweat suits, they were considered to symbolize the nature of the relationship between wives and their family.

研究分野：家政学

キーワード：衣生活 主婦 良妻賢母 明治 大正 イギリス 家事労働 寝衣

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 24～25 年度挑戦的萌芽研究「家庭内衣服行動の変容から考える現代の家族・生活の研究」において家庭の中の衣生活の研究に取り組んできた。その結果として、家庭内労働着であるエプロンが主婦・母親の象徴としての服飾品であったこと、しかしその一方で、エプロンが良妻賢母の象徴であるがゆえに、意識的に着用されなくなった背景が見いだされた。

この研究を通して得た知見のもと、主婦とエプロンとの関係性に着目した。今日のエプロンは日本では明治の洋装化の流れの中で導入されたものである。しかしながらそれがすぐに主婦や母親の表象となったわけではない。当時の女性と前掛けの関わりについては、「明治後期割烹着風前掛けの表現」(岩崎雅美, 2000)に詳しい。一方、近代家族や主婦の概念が形成されたイギリスでは、階級制が人々の生活様式に深く影響しており、エプロンは使用人を表象する服飾品であった。エプロンが家庭内での労働着であることを踏まえると、家事労働と主婦との関わりも考慮することが必要である。家事労働の変化と女性の労働の関わりについては Cowan, R.S. による “More work for mother” (1983) によって、家事労働の質が変化するとともに、主婦が担う家事労働の内容や、費やす時間が増えたと分析された。主婦とエプロンの関係が成立していく背景には、社会的な階級制、家事労働、そして主婦の役割の変化などの要因が複合的に存在している。

エプロンは主婦・母親の表象としての服飾品であるが、主婦・母親の服装およびその規範とはエプロンのみではない。時系列的に主婦・母親に求められた装いの姿を検証することで、服飾の持つ表象性を明らかにすると同時に、主婦・母親をめぐる家族関係、ジェンダーの問題点について、新しい視点を示唆することが可能であると考えた。

2. 研究の目的

本研究では 19 世紀末以降現代までの、日本の主婦・母親の立場と装いの変容に着目し、そこから女性の生き方と家族の問題について検討する。女性のライフスタイルの中で、婚姻関係を結び、家族を形成することは主婦や母親としての役割を担うことを選択することになる。その場合、服飾行動において女性としての装い以外に、主婦としての服装、母親としての服装といった規範が求められる場合がある。さらに本研究では、日本の近代家族観の形成に影響を与えた欧米の状況と比較検討することを試みる。従来の服飾史研究においては、取り上げられることの少なかった本研究の取り組みは、服装という視点から主婦像、母親像を分析することで、服飾の持つ表象性を明らかにすると同時に、主婦・母親をめぐる家族関係、ジェンダーの問題点について、新しい視点を示唆することが

可能である。

3. 研究の方法

まず、日本の近代的家族観に影響を及ぼしたと推察される欧米の主婦像・服装規範について、19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリスの中産階級の家庭と主婦を対象に、同時代の雑誌 *Girl's own paper*, *Ladies Realm*, 婦人向けマナーブックといった文献等を調査した。

次に明治以降、欧米思想の影響を受け、日本においても近代的な家族観がひろがった。その中で主婦・母親にはどのような姿・装いが求められてきたのか。明治末から大正にかけての家庭における主婦の装いを、同時代に発行された婦人雑誌『婦人世界』(実業之日本社発行 1906 年創刊)『主婦之友』(主婦の友社発行 1917 年創刊)の言説から分析した。着目点として、家庭内での主婦像、家事労働と衣生活の変化、主婦が管理した衣服と家計費との関連についてである。

さらに第二次世界大戦以降の衣生活に着目した。日本では生活の欧風化に伴い、新たな主婦の姿が創出された。戦後日本の高度経済成長を背景に、衣料品の生産消費は大幅に伸展を遂げた。衣服の大量消費時代に、主婦の装いには何が求められたかについて、主婦の表象としてのエプロンに関する検証に引き続き、主婦の寝衣の変容について、一般紙および、婦人雑誌『婦人倶楽部』(講談社発行 1920 年創刊)『主婦と生活』(主婦の生活社発行 1947 年創刊)などから検討した。

4. 研究成果

(1) 明治末以降の日英の主婦像の比較検討
日本が近代的家庭像を西洋に範を求めたことから、日英の主婦像と衣生活を比較検討した。

1) イギリスの主婦像

マナーブックからは、女性の家庭での装いにおいて一番肝要なことは「ジェントルウーマンはいつなんどきでも上品 (daintier) である」ように留意することであり、そのような魅力的な装いの妻であれば、夫と言い争うことを必要とせず、家庭や夫を上手に操縦、取り仕切ることができるのである、とその装いの意図を説明している。

主婦には家庭を取り仕切ることだけでなく、女主人の役割を果たすことが求められた。AT HOME (在宅招待日) という習慣において、主婦は客人をもてなす女主人であり、その力量が求められた。

婦人雑誌に掲載された At Home の装いには新しさとともに、装飾的でありつつ軽やかさ、明るさ、控えめな上品さが適していたことが雑誌の服飾紹介記事から明らかになった。これはマナーブックで指摘された、「落ち着いたある控えめな装いが、客人の心を和ませる」こととも一致している。家庭の中における主婦の装いはセミフォーマルな場面では

用するレベルのものでもあり、夫や家族のためであるだけでなく、家族以外の他者の視線をも意識していた。このような主婦としての装いの規範を実践できることが、自身や家族がリスペクトされるクラスに属することを表明していたと言えよう。

2) 日本の主婦の装い

まず、身嗜みへの意識は、良人のためであると同時に、家庭を円満に運営するためのものでもあった。つまり身嗜みを怠ることは、見苦しく、家庭内の不取り締まりも想像できること、ひいては良人に敬遠される基となるから、主婦となっても化粧をたしなむべきであるという意見も述べられている。主婦として常に身嗜みを整えることは、自分を愉かにさせ、良人を悦ばせ、家庭運営にも抜かりがないことを周囲に知らしめる結果となる。すなわち家庭を取り仕切る主婦の役目なのである。

次に、粗服を身につける母親の行為は、「今でも、流行の着物などを着てみようなどといふ心になりませんのは、たしかに無言の間に母から受けた教訓の賜物」と回想されており、結果として流行に流されない、人の服装をうらやましがらない子どもの心を育て、無言の教訓となるのである。つまり、主婦が粗服を着用することは、儉約という金銭面での美德行為というだけでなく、賢母として子どもを育て・教育する面での大切な意味を持つ行為であったといえる。

明治期の洋装化は主に社会的活動をする人物、特に男性から受容された。家庭生活において主婦は和装を継続したわけではあるが、直接的な衣服形態ではなく、衣生活、身だしなみに関して西洋を意識する点が確認された。主婦の意識を良人を悦ばせるためのみならず、社交に向けさせることは、婦人を国民として社会に参加させることに他ならない。また、西洋への意識では、家族からの視線という点で家庭内でも礼儀を持って身ざれいに装うべき、と掲げた。さらに、社交を勤めるということは、他者からの視線を意識し装うことも意味している。

しかし、両者の行動と衣生活を比較すると明らかな相違がある。それは家庭でのもてなしの場での女主人という役割である。英国の婦人は「落ち着いたある控えめな装い」の女主人として、家庭もまた社交のステージにして社会とのつながりをもった。それは同時に、家庭を取り仕切る主婦としての技量でもあったのだ。

一方、日本の主婦にとり家庭はあくまでも私的領域であり、社会とのつながりの場ではなかった。『婦人世界』にて西洋の婦人の行動を紹介する一方で、日本の主婦が女主人であることに言及されることはない。また、客人を迎え入れる主婦の姿を引き立てる At Home の装いに相当する、日本の主婦の服装は登場しない。当時の一般的な日本の主婦の家庭内の日常の装いは、家人以外の他者を意

識したものではない。

日本の良妻賢母像には「子を育て、教育する役割」「夫や舅姑に従順」「家事の遂行、家政の管理」する役割が求められたことと、目立ち過ぎない衣服や粗服を着用し、家事労働着で家庭内労働にいそむ姿とは、図らずも一致していたといえる。「女は男の活動を家庭にあって支え、次の世代を育てることが、間接的に国民としてとらえられ、国民統合されていくことが良妻賢母思想の理念であったが、実際には従順さなどの婦徳への期待といった、思想と現実とのズレが生じていた。日本の主婦像は西洋に近代的な家庭像の範を求めたが、家庭内における主婦の在り方についての本質的な違いが、その服装規範から明らかとされた。

(2) イギリスの家事労働と主婦像

1900年前後のイギリスのミドルクラス以上の家庭生活は家事使用人による人的労力によって成立していたと言って過言ではない。家事使用人は労働力として、また社会的ステータスシンボルとしての役割も担っており、ミドルクラスにとっては労働者階級との差異を強調するためにも、家事使用人の存在を必要としていたと考えられている。1900年当時のイギリスの人口は4710万人、そのうち女性の家事使用人はおよそ150万人存在であった。雇用主の経済状況に応じて使用人の職掌は細分化され、エプロンとキャップに象徴されたその姿はさらに、時間帯などでも細分化されていた。これらもまた雇用主のステータスを示す装置となっていた。

しかし20世紀に入り、経済活動の変化により、家事使用人を欲するミドルクラスが増加したこと、また女性の職場が商業や工場労働に拡大したことが関係して、女性の家事使用人は前世紀と比較して欠乏する傾向にあった。

このような状況にあたり、婦人雑誌には家事代行業の会社の紹介、家事使用人の雇用者であった階級の女性に家事の重要性、その習得の必要性を説く記事などが登場した。また、教育的な主題として家政科に対する関心は高まり、家政科教育は女性としての価値を高め、主婦になった時に家庭をスムーズに運営する能力を身に着けることを強調した。特にミドルクラスを対象とした教育では家事を合理的・科学的に学ぶことで、女主人としての能力を高めることが期待された。家事の記事はエプロンを着用したモデルにより演出され、家事行為を美德として読者にイメージさせる誌面構成であった。家事労働は家庭の主婦たちの手に担われた。

学校教育などを通して、合理的な家事を習得することで、家事が新たな営みに転換されていること、古き良き時代のイメージを模索する姿が関わりあい、エプロンをつけて家事を行う主婦は新たな主婦像として誕生したものであると考えられる。

(3) 大正時代の主婦の衣生活と家事労働

明治末の良妻賢母思想が、主婦に「家事の遂行、家政の管理」の能力を求めようになると、家事労働は主婦の重要な任務となった。

主婦が家事労働の中でも多くの時間を割いた、衣服を扱う仕事について着目すると、新中間層の家庭の主婦にとって、家族の衣服の準備は、重要な仕事であった。主婦自らが、衣服を整える仕事をするだけでなく、主婦が女中に裁ち縫いその他を教えること、また女中をつかって家族の衣服を準備させることも同様に主婦の役目であった。

しかしこの時期、家事労働の一翼を担う女中は人材不足の状況にあった。女中払底といわれ、その背景は「新中間層家庭の急増による、女中の雇用層が増加。第一次大戦を契機とする産業化の進展により、女工など、就労機会が他にも増えたこと。長時間の拘束や、プライベートの欠如など若い女性が住み込みの女中仕事を好まなくなる」といったことがあげられている。

女中払底と言われる中、人材不足、人件費削減、といった現実的な理由だけでなく、女中を廃して主婦自らが労働することで健康増進、体力向上といった効果をあげられると雑誌記事では述べている。また、家庭内から女中を排除することで、家族の親密な時間をつくることのできるといった記事もあり、核家族である新中間層の新しいライフスタイルへにもつながった。

主婦が女中を使わず全ての家事をこなすようになってくると、これまでの家事労働量、時間を如何に削減するかには主婦が頭を使うようになった。主婦が女中を取り仕切りながら、和服を仕立てるさらに仕立て返す労働の負担の多い衣生活から、女中をやめて主婦自らの労働力だけでこなすために、労働量や時間を軽減する工夫として、衣類の着数の整理、手数のかかる綿入れをやめる、ミシン利用、洗濯が簡便で仕立て返しが不要な洋服の採用、といった試み・変遷が読み取れた。それは自分自身の衣服だけではなく、主婦が整える夫・子どもの衣生活を変えることになる。すなわち主婦の位置づけの変化が家族の衣生活に影響を及ぼしたといえる。

(4) 大正時代の被服費

主婦がどのように家族の衣生活を管理・計画したのか、被服費の観点からみると、和服・洋服の二重生活への対応や夫と子どもに対する優先的な衣服調製が確認された。

大正期になると本格的な社会調査が始まり、特に都市部の職工労働者や少額俸給者の家計調査が進んだ。大正8年の俸給者と労働者の家計調査では、支出に占める被服費の割合は俸給者17.3%、労働者16.8%であった。特に俸給者は和服に加え、仕事着として着用する洋服にかかる金額が高く、和服と洋服の二重生活の負担が重くのしかかったことが

わかる。大正10年の家計調査の報告書では、被服費の家計に占める割合は12~14%が標準とされた。

第一次世界大戦による不況の影響で生活難が深刻化していた大正期には、被服費のみならず家計全般の節約が求められた。大正6年に創刊された婦人雑誌『主婦之友』には、費用を抑え、質のよい商品を選び、よく手入れをして長く使用するための実用的な情報が数多く掲載された。その中で、読者による家計報告がしばしば掲載され、各家庭における被服費の実際的な運用方法が窺える。

被服費は、食費のように毎月必ず出費するものではないため、使わない月は積み立てたり、年2回の賞与を当てたり、衣服の調製はおよそ1~3年のスパンで計画された。家族の衣服の中で優先されたのは、夫の仕事着（特に洋服代）と子どもの衣服であり、主婦の衣服はすでに所持しているもので済ませる事例がほとんどであった。ここからは自己犠牲して家族に奉仕する主婦の理想像を読み取ることができる。

しかし一方で、合理的な家庭生活のために主婦も洋服を着用すべきという提案もみられた。和服は洗い張りや縫い直しの手間がかかり、主婦の家事労働の大きな負担となっていた。そうした家事労働軽減の観点からも、主婦の衣服や家庭の衣生活が見直され、家庭内からの洋装への転換が試みられた。大正期の主婦は、家族の和洋二重の衣生活を支えながら、合理的な家事労働を志向し、積極的な改善策に取り組んでいったと考えられる。

(5) 生活改善運動と和服衣生活の改良

1) 和服の改良

大正時代は第一次世界大戦（大正3~7年）に伴う物価騰貴など経済的な混乱を経て、生活改善運動が提唱される中、和服に関する指摘は、長所はその優美さにあり、短所は・不経済、不衛生、非活動的、といった点に集約される。

子供服の洋装化、洋服への橋渡しとしての改良服については先行研究でも言及されてきた。しかし大正10年の『婦人世界』に掲載された「子供に洋服を着せることや朝飯をパンに代えることが改善であるなら、何のことはない改善というのは西洋化ということだろう」という記事の裏には、西洋化することだけが改善ではない、という意識が見え隠れする。そこで大正時代の主婦の衣生活の変容を、和服に焦点を絞り、主婦は和服の衣生活をどのように改良したのかを検証した。

着物の不経済性に対する改良として、衣服所持数の整理、地質の工夫、衛生的な着装として、着物の仕立て方の工夫、下穿きなど洋服類から採用した衣類の着装の工夫、が見られた。生活改善運動ではその趣旨は「もっと働きやすい」服を目指すことと掲げられていた。この時期の服装改善は女性も家庭内から国家を支える働き手にすることを目指した

といえる。和服が社会の要請に応じて改良・変化したことは、和服の現代化ととらえられる。

和装には「儀式に臨む、紋付き、裾模様、といった盛装の晴れ着」、「街に出て消費行動をする女性の外出着」、そして「家庭内での働く姿」という三つのカテゴリーがあった。

なかでも衣服所持数の整理を説明する記事に登場した、「普段着：家庭内の装いでも身だしなみを整え、外出着のお古とはいえ、お召や大鳥を着用する」という考えは、結果として普段着のレベルアップが図られたといえる。つまりレベルアップした普段着で家事労働を行うならば労働着を合わせる必要があり、20世紀の主婦像「和装に割烹着」が定着する必然性があったと考えた。

着物の改良は本質的な形状を変化させることではなく、西洋化されていく生活に応じてブラッシュアップしていった点にある。

2) 家事労働と衣服

家事労働用の衣服として、今回の調査資料の中での初見は『婦人世界』(1906年、明治39年)の弦斎式料理服である。これは現在の割烹着と類似の形式のものである。『婦人之友』(1914年、大正3年)にも家庭での調理などの作業に適した衣服を提案した記事が掲載された。家事を積極的に行うための衣服が和服をアレンジする形で登場し、『主婦之友』(1918年12月号)には「新案の婦人仕事着」が掲載される。それは「格好がよくて、働きやすく、暖かい」と宣伝されている。「女中を使はぬのを主婦の名誉とせよ」(1918年10月号)という記事タイトルのように、家事労働が主婦の重要な任務となり、仕事着は主婦のものとなった。さらに「新案の婦人家庭着」(1920年11月号)の記事からは、家庭着は仕事着と同様の意味をもつことがわかり、主婦にとっての家庭の姿は家事労働の姿であると考えられる。

大正初期の主婦は家庭内労働を担う立場となった。その装いは「質素なもので、せつせとおしごとを遊ばしておる方が、却って脇からは立派に拝見いたされます。」(『主婦の友』1918年10月号)とあるように、行為と結びつくことで「良妻賢母」を具現化していたのである。

(6) 第二次大戦以降の主婦と寝衣

第二次大戦以降の20世紀の日本の家庭生活におけるナイトウエアに着目し、主婦とその家族の衣生活について検討した。この時期の生活や家族の特徴的な動向としては、生活の欧米化、高度経済成長期の消費行動の拡大、60年代後半には核家族世帯が過半数を超え70年代には戦後生まれで友達夫婦とも言われた「ニューファミリー」が国民生活白書(1977年)にも初めて取り上げられた。また、共働き世帯率は1980年には約35%であったが、1997年以降は共働き世帯数が男性雇用者と無業の妻から成る世帯数を上回っている。

このような生活形態や生活時間の変化が主婦の衣生活に変化を及ぼしていることを踏まえた。

戦後の日常生活が洋風化する中、ナイトウエアもまた和服形式の寝間着にかわりネグリジェやパジャマ形式がひろく採用されていった。60・70年代までの記事ではネグリジェにおいて主婦が夫に望まれる姿を体現しようとしていた。それは夫婦間の「ムード」を演出する重要なアイテムであった。

家族の衣服を主婦が仕立てるといった行為は、第二次大戦以降次第に減少し、今日のように既製品が主となる衣生活に変化した。しかし市場に流通するナイトウエア商品が豊富になった70年代には、主婦による手作りナイトウエアは「主婦の手製による愛情表現」や「夫婦や親子のおそろいのナイトウエアによる家族の親密さを演出」といった意味を含んでいた。すなわち主婦にとってナイトウエアとは夫婦や家族のコミュニケーションツールの一つであったと考える。

80年代には日常的な衣服にはカジュアル志向が広がり、主婦のナイトウエアもスポーツウエアのテイストが採用されるとともに、寝間着と日常着との着用区分や生活時間と衣服の関係が曖昧になった。それらは他者から見られてもよい服装であると同時に、ユニセックスなデザインは女性として意識されることを否定するような姿でもある。

このようにナイトウエアの変容は特に1980年代以降に顕著である。第一にナイトウエアは既製衣料品の利用が主となったこと、第二にカジュアル&ユニセックス志向に移行したことが指摘できる。これはファッションデザイン全般の傾向とも同調している。ただし、さらにその背景について論じる余地があるであろう。

生活形態や生活時間の問題として、特に増加傾向にあった「共働き」をめぐる、朝日新聞(1979年)では『子育て論争』が多数の読者投稿によって繰り広げられた。その中には女性だけが働くことと子育ての板挟みにならざるを得ない社会の現実に疑問を呈す声も取り上げられている。すなわち主婦は専業か、兼業かに関わらず夫に付随する立場でなく、同等の家族構成員であると認証されることを望んでいることを示している。主婦のナイトウエアが夫とムードを意識し、女性を可視化するネグリジェから、スポーツウエアテイストに移行したのは、このような主婦の位置づけの変化とも関わっているのであろう。もちろん80年代の主婦も女性として夫婦関係を構築していくことに変わりはない。しかし、少年少女期を過ごした70年代にTシャツとジーンズによるユニセックススタイルの先駆けを体験した友達夫婦にとって、親密さを演出するには過剰なムード演出のネグリジェではなく、男女が同じ立ち位置にあるスポーツテイストのウエアこそ相応しかったのだ。

第二次大戦以降の日本の家庭生活におけるナイトウエアは、主婦と家族の在り方を表象しているといえよう。

(7) まとめ

日本の高等女学校令において「賢母良妻教育」が提唱された明治末から大正期にかけての日本の主婦の装いをイギリスのそれと比較検討した。

イギリスの主婦には家政を取り仕切る女主人の役割が求められ、他者を意識した装いが求められていた。一方、日本の主婦には、家政を担う役割が求められたが、社会とのつながりを意識した装いとはいえなかった。

また、この時期は社会における家事使用人の人材不足が起こり、結果として、家事使用人を使い家政を納める主婦から、家事使用人を廃し、自らが家事を行う主婦への転換期であった。日英ともに主婦が家事労働の担い手となっていく中で、家事労働着が主婦のイメージと重なっていく。イギリスではエプロン姿が幸せな家庭を作り出す主婦の装いとなる。日本では家事労働着が家庭着と呼称され、主婦と家事労働は不可分のものとなり、家人に仕え、家事労働を行うための装いが主婦の装いとなった。

さらに、家事労働着の誕生は家事を担うためだけではなく、日常着の位置づけの転換が背景にあることを、新たに見出すことができた。

現代の主婦の姿として、本研究では寝衣の戦後の変遷について検討した。男性(夫)の視線を意識するネグリジェから、スポーツテイストのカジュアルウエアへの移行は、単にアイテムの変化だけではなく、その背景には夫婦・家族関係の在り方の変化が関係していることを論じた。また、生活空間・時間の変容を視座にする新たな研究視点を見出すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 第二次大戦以降のナイトウエアから考える主婦と家庭生活, 山村明子, 国際服飾学会誌(51), 査読有, 22-31, 2017.

〔学会発表〕(計8件)

1. Mother and daughter consumption in the modern fashion in Japan, AKIKO YAMAMURA, 19th Biennial International Congress, 2017.
2. 良妻賢母による衣生活 大正期の家事労働の観点から, 山村明子, (一社)日本家政学会第69回, 2017.
3. Housewives and their domestic life focusing on nightclothes after the Second World War, AKIKO YAMAMURA, 27th International Costume Congress,

2016.

4. 大正期の家庭における被服費 家計に占める割合と実際の運用法, 難波知子, (一社)日本家政学会第68回大会, 2016.
5. 明治末期の良妻賢母の装い, 山村明子, (一社)日本家政学会第68回大会, 2016.
6. イギリス 20世紀初頭の家事と主婦の装い, 山村明子, (一社)日本家政学会第67回大会, 2015.
7. Clothing for Japanese good wife and wise mother in modern times, AKIKO YAMAMURA, 26th international costume congress, 2014.
8. イギリス 19世紀末から 20世紀初頭にかけての主婦の装い, 山村明子, (一社)日本家政学会第66回大会, 2014.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山村 明子 (YAMAMURA AKIKO)
東京家政学院大学・現代生活学部・教授
研究者番号: 60279958

(2) 研究分担者

難波 知子 (NANBA TOMOKO)
お茶の水女子大学・生活科学部・准教授
研究者番号: 80623610

(3) 連携研究者

上村 協子 (UEMURA KYOKO)
東京家政学院大学・現代生活学部・教授
研究者番号: 00343525